

## 沈緑の森

その、旧くから深緑の森と呼ばれていたその森は、いつの頃からか沈緑の森、とその名を変えて呼ばれておりました。

なぜならばその付近の丘陵地は、まるでその森を囲むように盛り上がり、その中の窪んだ広大な盆地たる森に向かつては朝夕に深く濃い陰を落としていましたから……。

それに加え、その森の樹々も樹齢を深く刻み込んだ太く高い針葉樹がその主たるを占め、季節を問わず、緑が……深く沈んだ緑が、森の色を支配しているからなのです。

沈緑の森の畔には、この森の起源と同じくらの昔とも思われるほどの古くから、一軒の家が、ありました。

森の略奪者の家、です。

春になれば森に分け入り芽吹く新緑の葉を摘み、夏になれば森に分け入り動物を捕らえ、秋になれば森に分け入り色づき熟した果実を採る……。

森は、大きなひとつの意思として、その略奪者の家との共存を心善しとはしていませんでした。

ただ、冬という季節には、その略奪者の家も沈黙し、森は静かな眠りにつけるのですが、結局その眠りを覚ますのは、春の訪れよりも早くやって来る略奪者の家の足音でした。

森の略奪者の家からの見返り、森へのお礼なぞついぞあろうこともなく、ただただ森への迷惑ばかりをかけたおし、なのです。

しかし、森は知りません。

森の略奪者の仲間たちが、沈緑の森だけには決して足を踏み入れようとしていないことを。

もしも、彼らまでもが足を踏み入れようものなら、沈緑の森は荒れ、大きなひとつの意思が破壊されてしまうだろうことなど、全然知らないでいます。

当たり前です。

森は、その沈緑の森だけでひとつの閉じた世界をつくりあげていましたから、悪く言えば井の中の蛙、です。

が勿論、悪く言えよう筈はありません。

森は、分相応、その窪んだ地にあつてこそその森、その世界、だとわかっているのです。

もしその窪地を越えて周りへとその世界を広げようものなら、永くその地で培ってきた様々な動物植物、そして土や石や小さな泉の湧き水などの無生物までもの生き方、が、全然役に立たないばかりか、下手をすれば死滅、元の窪地にももう合わすことができなくなってしまう……ことを。

ですから、森は思うのです。

その、そのたった一軒だけある略奪者の家、それさえなくなればこの森は至高の極みに達したひとつの確固たる世界として、これから未来永劫、決して衰えることなく、そして盛え過ぎることもなく、続くだろうと。

ところで、どうして沈緑の森に災いするのは、その畔のたった一軒の家だけなのでしょうが？

うがった見方をしますと、大抵こうなります。

そう、その一軒の略奪者の家自らが生きながらえるために、永い永い時間をかけてその森を沈緑の森と呼ぼせるまでに、周りにありもしない悪い噂を流していた……と。

ですが、真実は違っていました。

その略奪者の家はなにも言つてはおりません。

ただ、なにも言おうとはしなかった……のです。

略奪者の家は、古くから、沈緑の森の畔にありましたが、その家が、いつから、どうして、その地にあるのかは、その家の者すら知り得ません。

だから略奪者の家の者はそのことについてはなにも言いませんから、周りの者が勝手に憶測をするのです。

森の、沈緑の森の遣い人だと……。

だから、なにも言おうとはせず、その森を静かに見、護っている。

暗闇は恐怖、深い森には暗闇はつきもの、沈緑の森となるとその暗闇は昼でも闇夜のそれと変わりが無い。

理由は、そんなものでしょう。

だから、沈緑の森は沈緑の森と呼ばれ、一軒の略奪者の家以外、外から干渉しようとするものはありません。

けれども、考えてもみてください。

その一軒の略奪者の家、これは森の外の者なんでしょうか？

そう、善しも悪くも、もう森の内。

閉じられた世界に、もうどっぷりと入り切っているのです。

しかし、森は追い出したいと思っている。

だけれども、決してその一軒の略奪者の家は出て行こうとはしない。

生きる糧はその森に頼っている、閉じた世界のひとつの存在としての明確な主張です。

案外、これでいいのです。

未来永劫とは言わずとも、他の事態を起こすことから考えると、もうほとんど永久に近く沈緑の森はこのままもうちょっとで完璧な繁栄だ、というままだにあり続けることができるのです。

しかし、互いにその意志を貫かねばなりません。

どちらかが勝ったり、引いたりした時こそ最後。

一時の繁栄、後には爛熟の極みとして語り継がれる最後の徒花を咲かして、その華はひと瞬きの後、あつけもなく、散ることが約束されているの……ですから。

……今日も、略奪者は分け入ります。

森は大きくざわめきます、窪地の外側から向けられる畏怖を感じることもなく。

沈緑の森、そう呼ばれている森は、未だに自らの名前を知りません。

……彼は、自らを森だとも知らないのかも、知りません。

おしまい

2000,03,27 Maki Rouel

蛇足

かじつ うぐいす こえ たよ おもて で さくら つぼみ  
過日、鶯の聲を頼りに表へ出てみると、櫻の蕾も

かたく きま へん まさ きせつ うつ あきら  
その頑なな様を変じ、正に季節の移ろいを顕かにする

しゅんかん むか しなのめ むらさき そ ふ こち あま  
瞬間を迎えておりました。東雲は紫に染まり、吹く東風は甘

かおり ほら えんげん はだ な きづ うぐいす  
い馨を孕むまま嬌然と膚を撫でています。気付けば、もう鶯

こえ ほころ つぼみ おと ふ  
の聲はなく、綻ぶ蕾の音が降っていました。

先だつてのある日、ウグイスが鳴いているように聞こえて、その姿を見ようと表に出てみますと、櫻のつぼみもいつのまにかふくらとしてきておりました。明け方の東の空は朝焼けと夜の闇との中間の色に輝き、甘い香りを吹く温めの風は微笑みと共に肌を撫でていきます。ふと気を取り直すともうウグイスは鳴いていず、桜の花の咲く音が聞こえんばかりに桜が咲き乱れていました。